

胸のざわめき

中村浩治

富山県・六三・会社役員

思い切って書きます。高校では同級生だったけど、きれいで、成績がよくて、銀行へ勤める貴女は、車イスでハンコ屋の見習職人の私には遠い存在だった。それでも、お嫁さんになって欲しい、と言えるようになろうと頑張りました。

一度だけ、独立した当時の私の小さな店に、銀行の用で来てくれましたネ。そっと出したせんべいをポリポリ食べてくれました。母が「あんな娘、嫁さんに欲しいナ」と言い、その時私はなぜかオロオロと何も言えませんでした。

そのうちに貴女が結婚したと耳にして、それは当然と自分に言いきかせて私も見合い結婚。ところが離婚なされたと噂に知り、更に貴女のお母さまが、私が結婚したかどうかと訊ねておられたと友達から聞いて、自分の胸にあるざわめきがあったこともありました。

それから二〇数年。賀状だけの付き合い——謹賀新年——型通り以外、何も書けな

い素直でない自分にもどかしさを感じながら……。

「コージさん、大きいご注文ありがとうございます……」。私の会社が、ある会社と初めての取引が成立したことがあって、その社長が貴女の今のご主人だった……。そんな偶然に貴女が気づいて電話をくれた。高校時代の「コージさん」で。

ちよつとかん高い、澄んだ声が私の中の少女時代のイメージとピッタリ重なったのも嬉しいことでした。

また、数年が過ぎて貴女が入院されたと聞いた時も、見舞いたい、会ってみたいと思いつながら、出来ずにととうとう今日になっていきます。

もう両親のいない私は、昔の私を知る貴女に、よく頑張ったのネ、と褒めて欲しい——子供みたいですネ。でもそんな思いが今日までの私をどこかで支えていたのかも知れません。

この手紙、いつか貴女に、貴女にだけ読んで欲しい。

今は娘が二人、そして孫も二人。お見せしたいぐらい可愛いです。貴女のことをさりげなく妻に言える年齢になりました。お幸せを祈ります。